

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

# NDL 書誌情報ニュースレター

2011年3号(通号18号)

## 目次

|  |                  |    |
|--|------------------|----|
| 『日本全国書誌』の提供方法が変わります                          | (収集書誌部)          | 1  |
| 講演会「MARC21 フォーマットについて—Aleph システム導入の経験から」開催報告 | (収集書誌部)          | 2  |
| 世界図書館情報会議-第77回 IFLA 大会(プエルト・リコ、サン・ファン)報告     | (収集・書誌調整課 大柴 忠彦) | 4  |
| TP&D フォーラム 2011 での発表報告                       | (収集・書誌調整課 大柴 忠彦) | 8  |
| コラム:書誌データ探検 分類(3) 分類作業のその先に                  | (収集・書誌調整課 大柴 忠彦) | 10 |
| 掲載情報紹介                                       |                  | 11 |
| 編集者からの一言                                     |                  | 12 |

## 『日本全国書誌』の提供方法が変わります

当館では、ウェブ時代の書誌データ作成・提供の在り方について検討を行い、[「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針（2008）」](#)、[「国立国会図書館の書誌サービスの新展開」](#)などとして、お知らせしてきました。

『日本全国書誌』は、2002 年 13 号 (通号 2372 号) から冊子体に加えホームページでの提供を開始し、[2007 年 23 号 \(通号 2632 号\)](#)からはホームページ版のみで提供してきましたが、上記の方針等に則し、2012 年 1 月から業務システムのリニューアルにより新しくなる NDL-OPAC で提供することとしました。

OPAC の機能を利用し、MARC 形式での書誌データのダウンロードも可能とすることで、さらに皆様に活用いただけることを目指しています。

※ホームページ版『日本全国書誌』のバックナンバーは、今後も[「インターネット資料収集保存事業」](#)でご覧いただけます。

### 新しい全国書誌

新しい全国書誌は、NDL-OPAC に設けられる予定の[「書誌情報提供サービス」](#)というページで提供いたします。主な特徴は以下のとおりです。

- (1) 任意の期間を指定し、その検索結果としてご覧いただけるようになります。
- (2) 期間を設定した検索結果集合をさらに資料種別、出版年、キーワード等多様な項目で絞り込んでの再検索が可能となります。排列も「出版年 (新しい順) → タイトル (昇順)」などに変更できるようになります。
- (3) MARC 形式 (MARC21 フォーマット)、引用形式等でのダウンロードが可能となります。  
※但し、大量のダウンロードは、営利・非営利に関わらず、申請をしていただくことを予定しています。
- (4) 新しい全国書誌に含まれる書誌データには、随時更新が反映され、常に最新の『日本全国書誌』が入手できるようになります。

(収集書誌部)

## 講演会「MARC21 フォーマットについて—Aleph システム

### 導入の経験から」開催報告

国立国会図書館は、2011年7月28日に講演会「MARC21 フォーマットについて—Aleph システム導入の経験から」を開催しました。慶應義塾大学メディアセンター本部課長の入江伸氏を講師としてお迎えし、当館が2012年1月から予定しているMARC21 フォーマットでの書誌データ作成・維持管理や、今後の目録の在り方、当館に望むことなどをお話いただきました。おもに当館職員を対象とした講演会でしたが、館外の方にもご参加いただきました。以下、講演内容の概要を紹介합니다。

#### 【目録の在り方について】

慶應義塾大学では、1998年に導入した図書館システムのKOSMOSIIからUSMARCを採用しており、Aleph (図書館用パッケージ・システム) を用いた現在のKOSMOSIIIでも、USMARCの後継であるMARC21を用いている。

目録は、検索媒体やコンピュータ性能など時代によって変化するものである。インターネット時代にはその時代に合った目録(メタデータ)の考え方やシステムがあると思っている。今のOPACは、カード目録を元とした、資料の所蔵場所や請求記号を調べるためのシステムであって、インターネット時代には別のシステムが必要になる。今後のシステムは全文データへのリンク情報が極めて重要になっていくと考えている。目録は請求記号で本の所在場所を示すが、メタデータはURIでインターネット上の全文を示す。メタデータは実体と電子データのリンクデータであるとした場合、物理単位のメタデータの方が処理しやすいと思っている。日本では、流通MARCの関係があり物理単位に近い単位で書誌データを作成しているため、一括記入の書誌よりも全文データへリンクするメタデータに適応しやすい。また、一括記入の目録データは、個々の資料に対する出版年、言語、媒体区分などのコード化情報が欠落してしまう問題がある。記述だけではなく、図書館では軽視されがちだったこのようなコード化情報を記録することは、インターネットでの検索には重要な部分である。

#### 【今後の目録作成】

これからは、出版社、図書館、研究者やその他の機関が作成したメタデータを共有して使おうというモデルになる。それぞれが連携し、相互理解を進めながらデータを作成し検索を充実したものになくなくてはならない。協働していくためにも、メタデータのワークフローこそが最も大事になり、リアル世界とインターネット世界・メタデータと実体を同定する識別番号が必要となる。特にISBNが付与される以前の和図書に対する国際的な識別番号が課題となる。国内においては、JAPAN/MARCの番号が望ましいが、他の商用MARCを利用している図書館の目録には反映されていない。インターネットで多くの人たちがメタデータを作成し流通させている時代においては、そこに対応するメタデータと共有するキーとなるIDの仕組みが重要である。

大学図書館にとっては、運用コストの面からも、紙資料の作業を省力化して電子資料にシフトしてい

くのが大きな仕事である。インターネットへの貢献としては、著作権レジストリに発展する可能性もある典拠データベースは重要である。

### 【当館に望むこと】

[「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス開発版」](#)（「Web NDL Authorities 開発版」）は素晴らしいシステムであるが、どのように他機関との共同事業にしていくかを検討して欲しい。図書館のメタデータを図書館だけにとどまらず、多様なコミュニティと共有し、充実させていくことが、今後は重要となってくる。

国立国会図書館作成書誌の OCLC への提供は評価されることである。フォーマットを MARC21 として、国際化対応をするのであるから、ローマ字や著者名典拠のヨミなど、国際標準と異なっている部分についても、機能拡張で対応してもらえるように積極的にアピールし、国際的に日本の書誌情報のプレゼンスを高めて欲しい。

(収集書誌部)

## 世界図書館情報会議－第77回 IFLA 大会（プエルト・リコ、 サン・ファン）報告

「世界図書館情報会議（WLIC）－第77回国際図書館連盟（IFLA）大会」が2011年8月13日から18日にかけて、プエルト・リコ最大の都市サン・ファンにあるプエルト・リコ・コンベンション・センターで開催されました。国立国会図書館代表団7名の一人として、書誌関連のセッションを中心に参加しましたので報告します。[1] [2]



会場となったプエルト・リコ・コンベンション・センター

IFLAにおける書誌関連の分科会は、図書館サービス部会 (Division 3) のもとに、[書誌分科会 \(Section 12\)](#)、[目録分科会 \(Section 13\)](#) 及び[分類・索引分科会 \(Section 29\)](#) の三つがあります。筆者は今期から書誌分科会の常任委員に選出されたので、その常任委員会へ委員として出席しました。目録分科会及び分類・索引分科会へは、それぞれの常任委員会へオブザーバとして出席し、またサテライト・ミーティング及びオープン・セッションへ参加しました。分類・索引分科会のオープン・セッションではペーパー発表を行いました。

今年の大会全体のテーマは「図書館を越える図書館：すべての人々のための統合、革新、情報」

（“Libraries beyond libraries: Integration, Innovation and Information for all”）でした。この全体テーマは、書誌関連の各セッションにも反映していました。書誌データをオープン・アクセスなものとして提供するという昨年の大会における議論 [3] が引き継がれ、それが今年テーマの下でさらに展開されていました。いわば「(閉じた) 書誌データを超越する (開かれた) 書誌データ」というテーマが、今年書誌関連セッションの全体に流れているかのようでした。さらにはまた、Linked Open Data (LOD) [4] が今年キーワードのひとつともいえる印象でした。

10人の新任メンバーを迎えた書誌分科会常任委員会の課題のひとつは、一昨年に刊行した『デジタル時代の全国書誌』という指針の推進及びこの指針に基づく事例の集約です。さらに、全国書誌について LOD としての公開を拓げていくことも将来計画として提示されました。

委員会ではまた、米国議会図書館 (LC) から、LC が検討開始を発表した [書誌フレームワーク変革](#) について発言がありました。FRBR (Functional Requirements for Bibliographic Records) や RDA (Resource Description and Access) の成立は、それだけが理由ではないが、しかし検討開始の理由のひとつはある、また現時点では具体的なことを報告できる段階にはないが、10月に計画のドラフトを公表する予定だとの説明でした。[5]

当館からは典拠データについて LOD として公開したことを簡単に報告しました。後述するように、この典拠データの公開については、分類・索引分科会のオープン・セッションにおいてペーパー発表を行いました。

なお、書誌分科会は、来年の大会において、「デジタル時代の書誌」をテーマに目録分科会と共同でサテライト・ミーティングを開催する予定です。

目録分科会が開催したオープン・セッションのタイトルは「目録：障壁を破ること」 (“Cataloguing: Breaking barriers”) でした。スロベニアからは、古い目録慣習と新しいニーズとの間の「障壁を破る」ための実践として、FRBR モデルの目録への適用の発表がありました。また、スペインからは、典拠データを LOD として公開する試みが発表されました。

この典拠データの LOD 提供は、分類・索引分科会が開催したオープン・セッションとも呼応しました。「領域、コミュニティ、システムの橋渡し」 (“Bridging domains, communities and systems”) と題されたセッションでは、LC から、典拠データや各種コード等を RDF/XML 形式で提供している [「Authorities & Vocabularies」](#) について発表がありました。当館からは、セマンティック・ウェブ志向のサービスとして、[「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス開発版」](#) (「Web NDL Authorities 開発版」) について発表を行いました。[6] LC の「Authorities & Vocabularies」も当館の「Web NDL Authorities 開発版」も、典拠データを LOD として公開しているものです。ポスター・セッションにおいても、ドイツ国立図書館から典拠データの LOD 提供についての発表がありました。

特に事前に示し合わせたわけではもちろんないにもかかわらず、これだけ各国から典拠データの LOD としての提供についての発表がそろそろことに驚き、またそれが世界の潮流であると認識を新たにし、かつその流れに遅れることなく当館から発表ができたことに嬉しさと安堵を覚えました。



ペーパー発表の様子

このほか、大会に先立って開催された目録分科会のサテライト・ミーティングでは、RDA が採り上げられました。LC が行った RDA 導入テストの報告があり、[\[7\]](#) それを受けてオーストラリア、英国、ドイツ、カナダから報告がありました。RDA の合同運営委員会からの報告で興味をひかれたのは、英語圏以外のコミュニティでも使いやすいように平易な英語で書く必要がある、という点でした。

同じく大会に先立って行われた [VIAF \(Virtual International Authority File\)](#) のミーティングへも参加しました。当館の状況についてコメントを求められ、本年度中にテスト・データを送付し、その後正式に VIAF へのデータ提供を行いたい旨発言しました。

筆者は今回が IFLA へ初参加でした。IFLA への参加目的には、生の情報の収集のみならず、発言や発表等を通じての当館のプレゼンス向上もあるでしょう。常任委員会は会期の前半と後半の計二回行われるのが慣例のようですが、都合上、会期中で帰国せざるを得ず、後半のセッションには出席できませんでした。最初は初参加・初対面で戸惑いつつも、書誌関連のセッションへの参加を重ね、またときおり発言をするうちに、次第に顔見知りが増え、分類・索引分科会での発表後には少なからぬ方々から感想をいただきました。さらにこれから、というところでの帰国は残念でしたが、当館書誌業務の認知度が少しは高まったかな、と感じました。

大柴 忠彦

(おおしば ただひこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] 大会のプログラム、発表ペーパーの一部については、以下に掲載されています。

<http://conference.ifla.org/ifla77/programme-and-proceedings> (参照 2011-9-8)

[2] 会議全体の概要については、「カレントアウェアネス-E」でも紹介しています。

<http://current.ndl.go.jp/e1214> (参照 2011-9-8)

[3] 昨年の IFLA 大会については、本誌 2010 年 3 号 (通号 14 号) にて紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3050798\\_po\\_2010\\_3.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3050798_po_2010_3.pdf?contentNo=1)

[4] セマンティック・ウェブに対応した RDF 形式によって広く提供されるデータのこと。

[5] LC の書誌フレームワーク変革の検討開始については、「カレントアウェアネス-R」でも紹介しています。

<http://current.ndl.go.jp/node/18297> (参照 2011-9-8)

[6] 「Web NDL Authorities 開発版」については、本誌 2011 年 2 号 (通号 17 号) にて紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3192138\\_po\\_2011\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192138_po_2011_2.pdf?contentNo=1)

[7] 英米目録規則第 2 版 (AACR2) の後継である RDA の LC 等によるテスト結果については、「カレントアウェアネス-E」でも紹介しています。

<http://current.ndl.go.jp/e1191> (参照 2011-9-8)

## TP&D フォーラム 2011 での発表報告

2011年8月19日、熱海で開催された「[TP&D フォーラム\(Technical Processing & Documentation Forum\) 2011](#)」[1]において、「国立国会図書館件名標目表 (NDLSH) の現状と将来」という題で発表を行いました。

2004年以降のNDLSH改訂作業[2]を概括した後、「Web NDLSH」を経て「[国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス開発版](#)」(「[Web NDL Authorities 開発版](#)」)[3]という形で行っているNDLSHの公開について報告しました。また、特に主催者側からの依頼に応じて、NDLSHの維持管理、特に標目新設のプロセスについて紹介しました。[4]

発表の最後では、フォーラムにおける議論を誘発することも念頭に、筆者の個人的見解として、NDLSHの汎用化及び各機関との共同作成という将来展望を述べてみました。たとえば、米国議会図書館(LC)の[SACOプログラム](#)のように、他機関と連携してNDLSHを共同作成することが考えられ、Web NDLSHを経てWeb NDL Authorities 開発版へと進めてきた新しい提供方法がNDLSH汎用化の契機となるのではないかと結びました。

質疑応答では、NDLSHの汎用化及び各機関との共同作成を目指すのであれば、NDLSHのシソーラス構造の背後に各機関へ示すべき明確な原理・原則が必要だとの指摘がある一方、あまりに原理・原則へ固執すると実践的ではなくなるという見解もありました。

なお、発表内容については、後日、「TP&D フォーラム論集」に収録される予定です。

大柴 忠彦

(おおしば ただひこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] 「本フォーラムは、図書館分類法、Indexing 論、情報検索、情報管理、目録法などの研究領域に関する研究発表および討論、そして全国の研究者の交流の場の提供をその趣旨としています。」(「TP&D フォーラム 2011 開催のお知らせ」による。)

<http://tpd.eplang.jp/index.php?%A5%D5%A5%A9%A1%BC%A5%E9%A5%E02011> (参照 2011-9-8)

[2] NDLSH改訂作業については、次の報告もご覧ください。

平成16年度書誌調整連絡会議報告

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/5threnrakukaigi.html> (参照 2011-9-8)

平成21年度書誌調整連絡会議報告

[http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h21\\_conference\\_report.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h21_conference_report.html) (参照 2011-9-8)

[3] 「Web NDL Authorities 開発版」については、本誌 2011 年 2 号 (通号 17 号) にて紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3192138\\_po\\_2011\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3192138_po_2011_2.pdf?contentNo=1)

[4] 標目の新設を含む件名作業のマニュアルについては、「国立国会図書館件名作業指針」として公開しています。

<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kenmeimanual.pdf> (参照 2011-9-8)

また、NDLSH 新設のプロセスについては、本誌 2009 年 3 号 (通号 10 号) のコラムにて紹介しています。

コラム：書誌データ探検 件名(2) NDLSH メイキング—件名標目新設の現場

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3507136\\_po\\_2009\\_3.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507136_po_2009_3.pdf?contentNo=1)

## コラム：書誌データ探検 分類 (3)

### 分類作業のその先に

[書誌データ探検の分類編第1回目](#)で述べられているとおり、図書館資料の分類の機能には、資料を書架に体系的に並べる「書架分類」と、OPACで分類を使って検索するための「書誌分類」があります。分類編第1回目では特に「書誌分類」の有効性について紹介されていました。「書架分類」ももちろん重要な機能で、その重要性の一端については、[本誌前号の「編集者の一言」](#)で引用したとおり、小説家ポール・オースターがその作品の中で見事に言い当てています。

先日、図書館資料の分類について、小学生向けの新聞から取材を受けました。記者の方から、小学生へ向けて分類の重要性を説くとしたらどのように説明しますか？と質問され、「よりよい本と出合う可能性があります。」と答えました。「書架分類」の機能により、同じテーマの本が棚の上に隣り合って並んでいます。自分が探していた本を棚の上に見つけたら、その周囲にも目を向けると、他にも求めている本を見つけることができるかもしれない、と。

このことは「書誌分類」についても言えるわけで、つまり、同じテーマの本が「目録の上に」隣り合って並んでいることで、さらに求めている本と出合う可能性があるわけです。

分類作業を終えてラベルが貼られたばかりの本を書架の上に置いたとき、その新しい一冊によって書架の「景色」が一変する印象をもった経験があります。図書館資料を分類して書架の上に、また目録の上に位置付けることは、単に新しい本が一冊追加される以上のことを意味するように思えるのです。

哲学者ミシェル・フーコーがギュスターヴ・フローベールの『聖アントワヌの誘惑』を論じて次のように言っています。

他の書物たちのかたわらにおかれるべき新しい書物というよりむしろ、既存の書物たちがかたちづく空間に、のび広がってゆく作品である。それらの書物を覆い、それらを隠し、それらを顕現せしめ、ただひとつの動きでもって、それらを輝かせ、また消してしまう。(『幻想の図書館』、工藤庸子訳)

これは、フローベールの作品についてのみならず、すべての図書館資料について言えるように思えてなりません。ひとつの新しい資料が書架の上に（さらには、目録の上に）加わる時、その資料は、すでにある他の資料たちのかたわらに単に置かれるのではなく、すでに並んでいた資料たちの存在をさらに輝かせ、ときには覆い隠す。そのようにして、資料が「のび広がってゆく」その先に、利用者が待っている、と表現したら格好つけすぎでしょうか。

大柴 忠彦

(おおしば ただひこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

## 掲載情報紹介

2011年7月8日～2011年9月29日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・ [統計からみた書誌データを更新しました](#)

統計からみた書誌データのページに、平成22年度のデータを追加しました。

(掲載日：9月1日)

- ・ [「個人名標目の選択・形式基準」を更新しました](#)

「個人名標目の選択・形式基準」を更新しました。

(掲載日：7月13日)

- ・ [雑誌記事索引採録誌一覧を更新](#)

当館が作成している雑誌記事索引に、現在記事を採録中もしくは過去に採録したことのある雑誌の一覧を更新しました。2011年9月22日現在の採録誌総数は、20,475誌で、そのうち、現在採録中のものは10,597誌、廃刊・採録中止となったものは9,878誌です。

(掲載日：9月22日)

- ・ [分類・件名 国立国会図書館件名標目表 \(NDLSH\) 2008年度版追録\(2011年6月～2011年8月\)](#)

2011年6月～2011年8月に更新した件名標目のリストです。各月に新設した件名には以下のものがあります。

2011年6月：「外食産業」 「福島第一原発事故(2011)」 「不正アクセス」 など

(掲載日：7月13日)

2011年7月：「エネルギー教育」 「スポーツマネジメント」 「睫毛」 など

(掲載日：8月9日)

2011年8月：「遺跡地図」 「混獲」 「スペースデブリ」 など

(掲載日：9月12日)

## 編集者からの一言

前号の「編集者からの一言」と似た題材ですが、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの「バベルの図書館」をご存知でしょうか？ この短編小説に描かれた図書館には、天文学的な数の本があります。全ての本が同じページ数、同じ文字数で、その1文字ずつについて、アルファベット、コンマ、ピリオド、スペースの全ての組み合わせの本が1冊ずつ所蔵されています。最初の1文字目がa~z、コンマ、ピリオド、スペースのバリエーションがあり、2文字目も……と延々続きます。全部aの本も、最初の文字だけaで残り全てbの本も1冊ずつあるというように、全ての文字について、アルファベットや記号の膨大なバリエーションが網羅される、つまりアルファベットで書かれうる全ての情報が、この図書館には詰まっていることとなります(ほとんどの本は無意味な文字の羅列ですが)。図書館のどこかには、私の伝記もありますし、私の未来も書かれています。「書誌情報ニューズレター」も、この「バベルの図書館」には、後ろが全てスペースのバージョン、コンマのバージョン、同じ号が繰り返されるバージョンなど、無数にあることとなります(ローマ字表記ですが)。

書かれた60年前は全くの夢物語だったかもしれませんが、今はこの小説からインターネットを連想する人が多いかもしれません。現代社会では、「わからないことがないのでは」と思えるほど、ありとあらゆる情報が駆け巡っています。網羅性ではバベルの図書館には勝てませんが、「どの本がどこにあるかわからないため、ほしい情報が得られない」という致命的な欠点をもつバベルの図書館に比べれば、インターネットでは各段に情報を得やすくなっています。

しかし、情報が多くなればなるほど、探す手段も向上しなくては、世界中の情報を整理しきれなくなり、どこになにがあるのかわからない「バベルの世界」になってしまうでしょう。そうならないように、図書館界でも「探している情報に簡単に行きつく方法」について様々な研究が進められています。対象とする「情報」も、図書館におさめられた紙媒体の本だけではなく、電子資料やWeb情報など、多種の形に広がっています。今号の記事からも、将来の情報整理に対する書誌からのアプローチの一端がうかがえるのではないのでしょうか。

世界の情報がバベルの図書館にならないように、図書館界もがんばっています。

(皇帝人鳥)

**NDL 書誌情報ニューズレター (年4回刊)**

ISSN 1882-0468 / ISSN-L 1882-0468

2011年3号(通号18号) 2011年9月30日発行

編集・発行 国立国会図書館収集書誌部

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1

E-mail: [bib-news@ndl.go.jp](mailto:bib-news@ndl.go.jp) (ニューズレター編集担当)